



Vol.40

机の上の小さな変革



問いの発動力

今回は、比較の視点から物事の新しい関係を探る方法について考えてみたいと思います。

さっそくですが、次の関係が成り立つ状況はどのようなものがあり得るか考えてみてください。

1円硬貨 > 500円硬貨

いかがですか？ 不等号という記号は数の大小関係を示すために使われる数学の記号のため、今回のような使い方は本来の用途とは違うのですが、ここでは、あくまで大小関係を示すための記号として考えてみてください。大きさも重さも額面も含めて、すぐに読み取れる既知の情報とは明らかに真逆の、1円硬貨のほうが大きいという向きに不等号がついているため、どのような関係だと成立するのか、あれこれ考えられたのではないかと思います。答えを言うと、これは硬貨自体の流通量（枚数）を示した関係を表わそうと書いたものです。



それでは、もう1つ同じようにやってみましょう。こちらの関係が成り立つ状況はどのようなものがあり得ると思いますか？

りんご > 地球

いかがですか？ かなり規模の異なる2つのモノについて、私たちのイメージとはまったく逆の方向の不等号

がついています。

実を言うと、私自身もあらかじめ何か特定の答えがあってこの関係を出したわけではないため、正解はありません。

強引に考えてみると、たとえば「人生でより早い段階で覚える言葉」など、いくつかの尺度が見つかるのではないかと思いました。物理的なサイズや量では難しそうですね、身近さなどからアプローチすると気づける視点があるかもしれません。

問いから生まれる解決策

このように、私たちは、どの視点から見ればこの2つの大小関係を成立させられるのだろうか、問いを投げかけられたときに強引に解決する方法を見出そうとします。興味深いのは、一見比較対象にならないと思えるようなモノ同士であったとしても、何らかの大小の差が生まれるようなポイントを発見してしまえるところです。着目の視点が「大小」と固定されているため、あとはどの部分の特徴を取り上げるのかを探せばよくなります。サイズや見た目の特徴から見つからなければ、属性やポジションなど、だんだんとそのモノの外の要素を探っていくことになるはずです。

問いによって探索する領域を絞りながら、これまで考えたことのない2つのモノの間のつながりを見つけないことは、視点を変える有効なトレーニングになります。●

PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。